

1. はじめに

今回行いました発掘調査は、特別史跡水城跡保存整備事業で計画されている水城跡土塁の復元整備に伴い、整備に必要な上成土塁裾部の位置や木樋の現状などの情報を得るために、3箇所の調査区を設定し平成 28 年 11 月 30 日から実施してきました。

2. 水城とは

「日本書紀」には 664 年、大宰府防衛のために水城が築かれた事が書かれています。水城は、福岡平野の南端に平野を封鎖するように全長 1.2km にわたり築かれました。土塁の幅は約 80m、高さは約 10m の大規模な人工構造物で、博多側には深さ 4m、幅約 60m の濠が造られ、太宰府側の内濠から博多側の外濠に水を送る木樋が造られていました(図 1)。この土塁を 2 段に分け、高い上部の土塁を上成土塁、下部の幅広い土塁を下成土塁と呼んでいます。

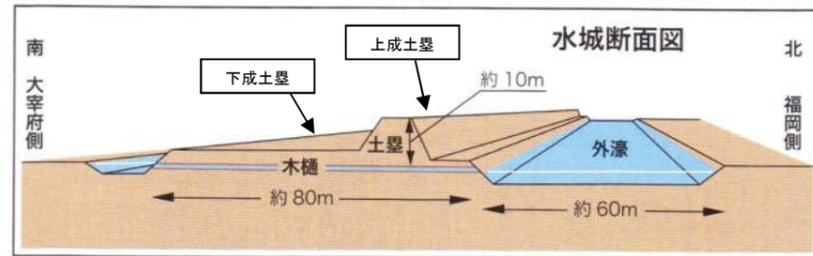


図 1 水城断面図（「目でみる大宰府」財団法人古都大宰府保存協会より転載、加筆）

3. 調査の目的

今回の発掘調査は特別史跡水城跡保存整備事業で計画される土塁の復元整備に伴い必要な基礎資料を得るため、各調査区（トレンチ）に調査の目的を設定し、調査を行いました。

【6 トレンチ】

木樋の現状確認と木樋・上成土塁・下成土塁の構築の関係の確認、道路際の土留め工事工法の検討のため、昭和 6 年に木樋が確認され、九州帝国大学の長沼賢海氏が調査を行った箇所において調査を行いました。

【7 トレンチ】

上成土塁の裾部の確認と上成土塁を作るのに設置されたと考えられる杭などの確認のため、平成 5 年に九州歴史資料館が水城跡第 24 次調査の北区の一部において調査を行いました。

【8 トレンチ】

上成土塁の裾部の確認と上成土塁の傾斜角度の確認のため、調査を行いました。

4. 調査成果

【上成土塁裾部の位置】 7 トレンチ（図 2）・8 トレンチ（図 4）

東門周辺の上成土塁の太宰府側は、以前の耕作により大きく削られていると指摘を受けていました。このことから、今後計画する土塁の復元のためには、上成土塁の裾部の位置を確認する必要があります。今回設置した 7 トレンチ、8 トレンチを調査し、上成土塁裾部の確認を行いました。

8 トレンチの調査で、上成土塁につながる灰色の粘質土層を確認しました。この層は緩やかに上成土塁に向かい上がった後、急勾配で立ち上がります（図 5・6）。また 7 トレンチでも灰色の上成土塁に向かって上がる層を確認しました（図 3）。これらの層と平成 26 年度に調査を行った水城跡第 59 次調査で見つかった東西方向の溝を繋ぐと、8 トレンチの更に西側の比較的良好に残っている上成土塁に繋がっていきます。このことから図 7 のように上成土塁の裾部の位置が推定されました。



図 2 7 トレンチ全景（南東上空から）



図 3 7 トレンチで確認された土層（北西から）



図 4 8 トレンチ全景（上空から）



図 5 8 トレンチで確認された土層（西から）

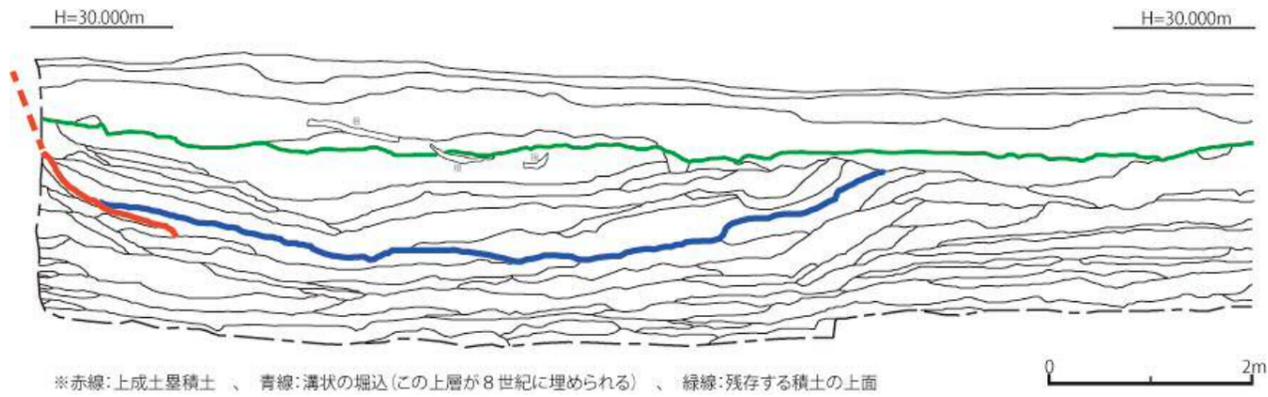


図6 8トレンチ東壁土層断面図

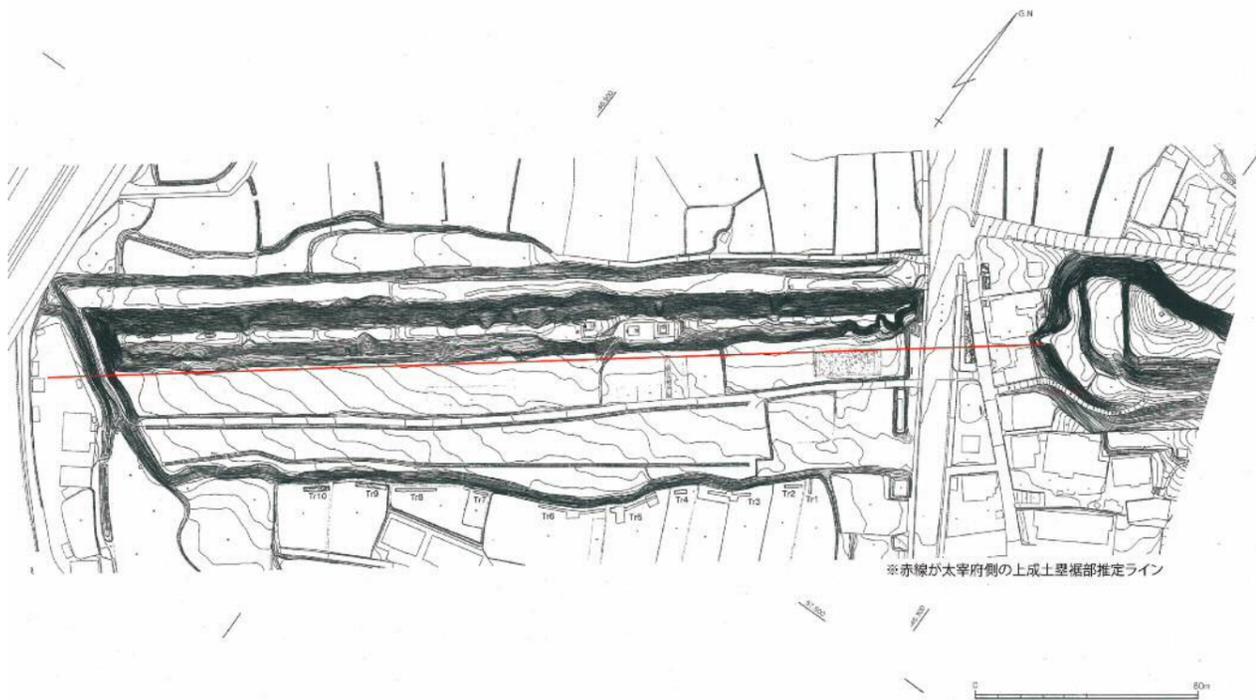


図7 上成土層太宰府側裾位置推定図

【木樋の現状確認】6トレンチ(図8)

今回再確認した木樋は、昭和5年に旧国道3号線(現 県道112号線)の開通に伴い移設された家屋の井戸工事の際に確認された木樋です。一部の部材は抜き取られていましたが、トレンチの南北両端に蓋板、側板、底板が残っていました。また蓋板と側板の状態は良くなかったが、底板は板材の角がしっかりと残るほど良好な状況で残っていました(図9・10)。

また、新たな発見としては、底板の接合部に板同士のズレを防ぐために施されたと考えられるホゾ穴が開けられ(図11)、板材が差し込まれていたことや、昭和6年の調査では東側の側板が丸太状の木材を2段積み上げていると記録されていましたが、丸太ではなく、西側の側板と同様に板材が使われ、折れて内側に落ち込んでいること(図10)を確認しました。



図8 6トレンチ全景(南東から)



図9 木樋全景(北東から)



図10 木樋全景(南東から)



図11 木樋底板接合部(北東から)

【木樋・上成土層・下成土層の構築の関係の確認、土留め工事工法の検討】6トレンチ

今回の調査では家屋の移設に伴い、垂直に近い状態まで土層が大きく削り取られていることを確認されました。このことから土層の保護を第一に考え、また調査の安全確保を考慮し、木樋・上成土層・下成土層の構築の関係の確認には今回至りませんでした。しかし、現地表面から約80cmは削られている状態を確認した等、今後検討される道路際の土留め工事に必要な情報は得られました。

5. おわりに

今回行った調査では、水城築造当時の土木技術の高さを再度確認することができるとともに、今後の保存整備事業に必要な情報を得ることができました。

また、平成26年度から実施してきました調査成果を基に、土層の復元と水城館の建築、官道整備が行われ、平成29年4月から、みなさまに利用していただける運びとなりました。今後も整備事業に伴い確認調査を実施する予定です。

今後もみなさまのご協力とご理解を賜りますようお願い申し上げます。